様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：８２７２３
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３３６６

研究課題名（和文）近世から現代までの東南アジア山地民の移動が国家にもたらした影響に関する研究

研究課題名（英文）Historical study on influences toward lowland states wielded by people moving in Southeast Asian Massif since early modern times

研究代表者
岡田　雅志（Okada, Masashi）

防衛大学校（総合教育学群、人文社会科学群、応用科学群、電気情報学群及びシステム工学群）・人文社会科学群・准教授

研究者番号：３０６３８６５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、近世～現代の東南アジア山地民の移動が関係諸国家に与えた影響を明らかにするものである。歴史の主体として周縁的な位置づけを与えられてきた山地民であるが、歴史学・人類学・社会学の手法を用い、ベトナム・タイ・アメリカ・フランスなど複数地での調査を実施することにより、山地民の国を跨る移動という営為が、近世以来、移動先の国境管理や住民把握に多大な影響を与えてきたことを明らかにした。加えて、近代以降、国民意識形成の文脈で山地民の存在が重要になると、山地民の側でも国家に対してどのような立場をとるかということが移動とあわせて戦略的な課題となったため、両者の関係が相補的に展開したことを明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究で明らかになった、山地民の移動という行為が近世から現代までの国家に与えた影響は、これまでの国家中心の歴史や、山地民の主体性を強調する歴史では、見えてこなかった点であり、単に視点を逆転させただけでなく、国家の形成・維持につきまとう人の移動という普遍的な問題を移動する側と管理する側の双方から捉えたものであり、新たな歴史叙述にも貢献するものである。
　また、難民としてディアスポラ的に世界に拡散した山地民が、各国民国家と自分達のコミュニティとの間で調整を行いながらアイデンティティを形成してゆくという本研究が提示した山地民像は、現代の国民国家とグローバル移民の問題を理解する上でも重要である。

研究成果の概要（英文）：　This study aims to clarify the impact that the movement of mountain people in Southeast Asia has had on the related states from the early modern period to the present day.
　Mountain people have been given a peripheral position as subjects of history, however, our study, conducted in multiple locations including Vietnam, Thailand, the United States, and France by using methods from history, anthropology, and sociology, shows that the movement of mountain people across countries has had a great impact on border control and understanding of the residents of the states since early modern times. Since modern times, the existence of mountain people has become important in the context of forming nationhood, and the position of mountain people in relation to the state has become a strategic issue along with migration, and the relationship between mountain people and states has become important.

研究分野：東南アジア史

キーワード：移民　ラオス　国家　ベトナム　山地世界　タイ　フランス　アメリカ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、近世から現代にいたる東南アジア山地民の地域間移動が、関係諸国家に与えた影響を明らかにしようとした研究である。従来、山地民は国家に対して受動的あるいは周縁的存在と見られてきた。一方で、近年の J.スコットの研究（『ゾミア』）のような国家を避けて社会を進化させてきたとする山地民の主体性を強調した歴史議論は。斬新である一方で、山地民の主体性を、国家の拡大に対する対応・抵抗の側面においてのみ見出そうとしている点が問題である。このような研究背景の中で、研究代表者は、これまでの研究において、山地民社会の生存を脅かすものは、自然環境や国際的な市場動向の変化といった諸要素の複合であることを明らかにし、その際には、むしろ国家を利用する側面も存在することを指摘してきた。つまり、山地民と国家の歴史的な関係において見落とされてきた問題、、**山地民の生存戦略の持つ多様な背景に注目した上で、山地民と国家との関係、特に山地民の主体的営為が国家に与えた影響**を捉えなおすことが重要なのである。

この国家に影響を与えた山地民の主体的営為の中でも、特に重要なのが移動である。山地民の国を跨る移動という営為は、特に関係諸国の国境管理や住民把握に大きな影響を与えており、とりわけ近代以降、国民国家にとって、いわゆる移民問題として重要政策課題として立ち現われ、そのため彼らのアイデンティティも政治化し、再び国家の存在に大きな影響を与えてゆくことになる。加えて移動の範囲も世界的に広がることで影響範囲も拡大してゆく。このように、**近世から現代という長期的視野で山地民の移動が国家に与えた影響を考察**することで山地民と国家の関係の実態が浮かび上がってくると考えられる。

２．研究の目的

１で述べた山地民の移動が国家に与えた影響を明らかにするために以下の目的を設定した。

（A）山地民の移動の国家に与えた影響の通時的解明

例えば、**近世に起こった中国の人口爆発と連動しながら起こった山地民の東南アジアへの移住現象が国家に与えた影響**は山地民社会を世界史に組み込む上で一つの重要な論点となるはずである。加えて、20 世紀の山地民の移動を特徴づけるインドシナ難民の西側諸国への移住は、旧宗主国と旧植民地、冷戦下でのアメリカと東南アジア諸国との関係など国家間関係を規定するとともに、受け入れ国の国民国家として輪郭形成に影響を与えてきた。これまでも東南アジアの民族移動に関する研究は一定の蓄積があるが、近代的国境形成されて以降の話が主要な論点であった。だが、上述のように、山地民の移動は前近代から大きなインパクトがあり、ミャンマーの少数民族軍閥の問題など現在の山地民と国民国家との関係を考える上においても、**近世以来の山地民の移動現象が帝国と周辺国家との間の境界を実態化していった側面を通時的に解明**することが重要であると考えられる。

（B）山地民のアイデンティティ変容と国家・グローバル化との関係

山地民のアイデンティティ形成については、従来、アンダーソンの「想像の共同体」論におけるエスニシティをネーション形成の付属物としてネーション同様の人工性を強調する議論がある一方、彼を批判したプロシャンはネーションから離れたエスニシティの存在を主張するなど、山地民のエスニシティとネーションとを対置して議論されてきた傾向がある。しかし、近年のエスニシティ形成のプロセスを重視する認識論アプローチ（ブルーベイカー）や近年の華人など移民の実証研究が示しているのは、移民のアイデンティティ形成は、元々の所属集団のエスニシティか移住先のネーション（への同化）かの二元論的なものではなく、より状況依存的で、ネーションもエスニシティも状況を構成する要素の一つにすぎないということである。このことは、移動を繰り返し、原住地から離れた新しい環境の下で自己の集団アイデンティティを形成してきた山地民にも適用できる。スコットの『ゾミア』においても、エスニシティを国家支配に対する目くらましとして用いるレパートリーとしてとらえる見方が提示されている。また、研究代表者自身のこれまでの研究により移動の共同記憶そのものが集団アイデンティティの形成に大きな影響を与えていることもわかっている。とすれば、残された課題は、ネーション、エスニシティ、移動の記憶がどのように関係し合いながら集団アイデンティティが構築されていくかという問題である。

その上で、考慮すべきなのは近年のグローバル化の影響である。従来は移動先環境に強く規定される中で、伝承される限られた民族文化リソースを再配置しながら、アイデンティティ構築が行なわれてきた。しかし近年のグローバル化によりその様相はさらに複雑化している。アメリカのインドシナ難民の場合、冷戦構造下において、彼らのアイデンティティは反共の旗の下にアメリカ市民と比較的容易に同調することができたが、アメリカとベトナム社会主義共和国との和解がなり、国境を越えた人々の交流が自由になる中、彼らのアイデンティティの再定義が行なわれている状況である。東南アジアの域内でも同様の状況が起きており、こうした移民定着社会のアイデンティティ形成の問題は、国家対移民の構造のみでは捉えきれず、グローバルな交流の影響とあわせ考察する必要がある。

以上のように、近世以降の変動の中で山地民が地域内、そして世界各地に拡散した現象は、現代のグローバル化によるサイバー空間／物理的相互交流の活発化とあいまって、近代的国境の相対化にとどまらず国民国家システムそのものを揺るがす状況を生んでいる。したがって、**近世から現代までの山地民の移動の国家の国境管理や住民編制に与えた影響を明らかにし、国民意識とグローバルに拡散した民族集団のアイデンティティの中で揺れ動く山地民自身のアイデンティティと国家の関係を総体的に明らかにする**ことが必要なのである。

３．研究の方法

２で述べた研究目的を達成するため、本研究では以下の手法をとった。

(i) 歴史学・人類学・社会学の手法を用いた学際的アプローチ

２で上げた二つの課題は、別個のアプローチによる別個の課題として取り組まれることが普通であったが、本研究では両者を統合的に一つの研究課題として進めることに方法論的特徴がある。山地民の移動の国家に与えるインパクトを明らかにするには、関係する地域の国家側の史料分析が必要となるため、多言語史料を用いた歴史学のアプローチが中心となり、他方、アイデンティティの問題は、インタビュー資料を中心に、個人の認識から特定集団、社会の内面構造を明らかにする人類学あるいは社会学からのアプローチが必要となる。しかし、近年のホームグロウンテロの問題などからも明らかなように、この集団の移動と交流のインパクトと移民のアイデンティティという２つの主題を統合的に検証することによってはじめて移民と国民国家の関係を解明しうるとの理解に立って研究を進めた。

(ii) 国を跨いだ複数地調査

世界各地に広がった山地民の移動を研究対象とするには、当然その全体を調査する必要がるが、実際には言語、時間、費用など多くの制約があり、実現してこなかった。しかし、本研究においては、複数地域（国）の現地言語を習得している研究代表者個人が複数地での調査を実施する点に大きな意義がある。

以上の２点の方法論的特長により、山地民の移動の世界史的インパクトを、長期的視野で分析することが可能となった。

具体的には以下のような調査を実施し、分析の基礎となるデータを収集した。

【近世～現代の国境管理、移住者の帰属に関する国家の認識】（（A）に対応）

・以下の６つの国家（政権）について国境管理・住民把握に関する史料を収集・分析する。

（中国）清朝～民国期の地方志、档案史料（王朝行政文書））の調査、分析

←既収集史料＋本研究予算で購入した『雕龍四庫全書存目』（電子版）を利用

（ベトナム）黎朝～阮朝期の地方志、硃本史料（中国の档案に相当する行政文書）、丁簿（住民台帳）の調査分析

←既収集史料＋ハノイ国家第一公文書館で追加調査・収集

（タイ）バイボック文書（地方からバンコク宮廷への報告文書）　※既収集

（仏領インドシナ）植民地文書

←既収集（フランス海外文書センター／ベトナム・ハノイ国家第一公文書館蔵）

（アメリカ・フランス・日本）難民受け入れ・定住政策に関する文書

←アイオワ州立文書館での資料調査に加えて CIA 文書など関連するオンライン公開文書を収集・分析（アメリカ）

←ローヌ県・リヨン都市圏公文書館及びリヨン市公文書館での資料調査（フランス）

・難民キャンプの管理・難民送り出し事業に関わる調査：アメリカでの文書調査に加えて、アメリカ・フランスでの難民へのインタビュー調査を実施

←藤沢市・横浜市在住のインドシナ難民へのインタビュー調査を実施

【近代～現代の山地民移住者のアイデンティティ形成】（（B）に対応）

・以下の山地民（タイ族）の移住先でのインタビュー及びアンケート調査

（タイ）ペッブリー、ナコンパトム

（アメリカ）アイオワ州デモイン

（フランス）リヨン

・Facebook 上のタイ族コミュニティ“Tai Dam Heritage”における調査

※以上の調査については、新型コロナ感染拡大期間における調査中止などにより、一部当初計画より調査地が変更となっているが、オンライン調査での代替や研究期間延長が認められたことにより概ね予定通りのデータを収集することができた。

４．研究成果

①近世における中国からの山地民の移動が国家に与えた影響について

18 世紀頃から盛んになる中国から東南アジアへの山地民の移動については、これまでの研究で言われてきたような華人の移動に伴う玉突き現象としてのみではとらえることができず、華人の移動の背景をなす 17 世紀後半以降の中国市場の拡大に端を発する広域の社会経済変容に積極的に適応した結果であることを明らかにした（論文②⑥など）。また、山地民の移動は、時に国家に対する脅威となると同時に、彼らの移動がもたらした社会流動性が周辺国家の国境認識や民族文化に基づく政治意識（リーバーマンのいう politicized ethnicity）に正負の大きな影響を与えたことを明らかにした（論文⑦など）。

②近代における山地民の移動が国家に与えた影響について

近代の東南アジアにおいては植民地化された地域（ベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマー）と独立を維持して近代国家形成を進めたタイを区別して扱う必要があるが、本研究によって、両者に共通点として、近代的国境が設定されたことや西洋的な国民（ネーション）意識の普及により、①の政治意識形成において、山地民をいかに位置づけるかがより深刻な課題となったこと、また、近代的国境により越境移動が制限された山地民に対して、近代に入りより移動が盛んになった華人との間で前者は在来性が、後者は外来性が強調されるようになったことなどを明らかにした。

特に、独立を維持したタイの国民形成において、山地民がどのような位置づけを与えられ、また彼らの移住現象が国民形成にどのような影響を与えたかについて、タイの中央エリートと山地民エリートが残したテキストの分析を中心に考察した結果、山地民を国民の一部として取り込みたい国家の側と国民としての地位を主張することによってこれまでの周縁化された社会的地位の向上を図りたい山地民エリートとの間で言説の相互利用関係が見られ、その実相が明らかになった（論文④）。

③現代における山地民の移動が国家に与えた（与えている）影響及び山地民のアイデンティティの変容について

タイ族難民を中心とした調査によって、タイ族がインドシナ難民としていち早くアイオワ州に受け入れられ、タイ族独自のコミュニティを形成することができた背景に、USAID（アメリカ合衆国国際開発庁）のオフィサーであった人物の働きかけがあったことがわかった。USAID は、ラオス中立化政策が失敗した後のアメリカの介入工作で重要な役割を果たした機関であり、よく知られているモン族の事例と同様、タイ族の指導者達がアメリカに協力したために難民として優遇された可能性が高い。こうして難民としてアメリカにわたったタイ族の指導者達は反共言説の急先鋒に立ち、ベトナム戦争の正当化に寄与した結果、アメリカ国内におけるインドシナ難民のプレゼンスを向上させたのである。この点に注目すれば、インドシナ難民はアメリカにより利用されたことになるが、国家にとって「価値のある難民」として受け入れたことにより、インドシナとアメリカとの人的結びつきが形成され、グローバル化が進み、冷戦構造が遺制となった後も、東南アジアからの移民受け入れ増大にも影響を与えていることなどが現地調査から明らかになった。フランスにおいても同様の構造が見られる。

アイデンティティの面においては、東南アジア在住のタイ族と、難民としてアメリカ・フランスに在住しているタイ族との間では、後者のタイ族コミュニティにおいては、難民として移住するまでの経験、特に難民キャンプでの経験が次世代に受け継がれ、民族アイデンティティの根幹となっているなど、大きな相違がある。

一方で、在住している国家の国民形成と自らの民族の語りとの間で調和的な調整が行われている点など共通点も確認できた。また、1990 年代以降、各地域の往来やインターネットメディアを通じた交流が可能になるにつれて、各地域間での語りの調整が進み、地域での相違が生じにくい神話時代の歴史が強調される傾向が強まる点も共通している。ただし、フランスにおいてはその傾向が少ないように見受けられる。フランスでは、SNS を利用した民族文化の発信は、アメリカに比べると少なく、文化活動における地域間の連携や、二世によるアート活動等による民族アイデンティティの問い直しなど、アメリカとは異なる動きが見られる。

以上のように、山地民は、移動という主体的営為を通じて、近世から現代まで国家に影響を与え続けてきた。近世においては、移動そのものが時に国家の存在を脅かすような存在であり、山地に影響力を拡大しようとする国家にとっては山地民を国家の中に取り込むことが死活的に重要であった。近代に入ると、近世に形成された山地民の実態的布置を前提として、国民形成において彼らの存在をいかに位置づけるかという点が焦点化され、その点において山地民の地域間の移動や時に彼らの意識が国家にとって重要になる。スコットが主張するような、山地民も国家に対してどのような立場をとるかということが戦略的な課題となったのはこの時期以降にあてはまるといえる。一方、20 世紀以降の難民としての山地民のグローバルな拡散は、彼らを包摂した国家に難民定住という新たな課題をつきつけるとともに、山地民のアイデンティティの政治化を進めることになる。ここにおいて、山地民のアイデンティティは個々の集団の戦略的課題ではなく、アイデンティティの形成・維持が山地民自身にとっての課題となったのである。そして、そのことは、同時に、山地民と国家との新たなアイデンティティ・ポリティクスの問題を生み出してゆくことを意味するのである。

このように、本研究を通じて山地民の移動が国家に与えた影響とそれに付随するアイデンテ

ィティの変容の長期的な位相が明らかにすることができた。これらの成果に基づいた新しい国家史に関する概説書の公刊も予定している（図書①）。一方、現代の山地民社会の移動やアイデンティティの地域的な差異など十分に明らかになっていない点も残されている。また、難民コミュニティのアイデンティティ形成に大きな影響を与えた難民キャンプにおける経験については、他の民族集団との比較などを通じてより深めていく必要がある課題であると考えられる。今後これらの点についても研究を進めてゆく予定である。

５．主な発表論文等

〔論文〕（計８件）

①岡田雅志「シナモンから見る近世東アジアの薬用資源流通と薩摩地方」岡田雅志・柳澤雅之（編）『CIRAS discussion paper 97　アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究―シナモンがつなぐベトナムと日本―』京都大学東南アジア地域研究研究所、2020、pp.5-16.

②岡田雅志「肉桂と徳川期日本―モノから見るグローカルヒストリー構築へ向けて―」秋田茂・桃木至朗（編）『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育―日本史と世界史のあいだで―』大阪大学出版会、2020、pp.292-317.

③岡田雅志「近世ベトナムにおける本草・博物書と植物資源―近世日本との比較の視点から」岡田雅志・柳澤雅之（編）『CIRAS discussion paper no.104 アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究（II）：ベトナム・日本の薬用植物資源流通と情報』 京都大学東南アジア地域研究研究所、2021、pp.5-26.

④岡田雅志　　「周縁から見るタイのネーション形成―黒タイとタイ・ソンダムのはざまで―」阿曽村邦昭（編）『タイの近代化―その成果と問題点―』文眞堂、2021、pp. 140-161.

⑤岡田雅志「周縁から見た一統志―南の小中華と『大南一統志』」小二田章・高井康典行・吉野正史（編）『書物のなかの近世国家―東アジア「一統志」の時代―』勉誠出版、2021、pp.214-227.

⑥OKADA Masashi、“The Link Between Global Market Change and Local Strategy: The Case of Vietnamese Cinnamon in the Eighteenth and Nineteenth Century、”AKITA Shigeru、 LIU Hong and MOMOKI Shiro (eds.) *Changing Dynamics and Mechanisms of Maritime Asia in Comparative Perspectives*、 Palgrave Macmillan (Singapore)、 2021、 pp.75-99.

⑦岡田雅志「近世後期の大陸部東南アジア」『岩波講座世界歴史 12　東アジアと東南アジアの近世：一五～一八世紀』岩波書店、2022、pp.225-243.

⑧岡田雅志「山地世界の生存戦略―西北地方の過去と現在―」『第 3 版　現代ベトナムを知るための 63 章』明石書店、2022、pp.191-195.

〔口頭発表〕（計８件）

①Okada Masashi、 Global aspects on Vietnamese Cinnamon: Historical Dialogues between Vietnam and Japan、 Area Studies & Vietnamese Studies: Research and Training orientation、2019.

②岡田雅志「周縁から見た一統志 －南の小中華と『大南一統志』－」シンポジウム「東アジアの一統志」、2019.

③岡田雅志「19 世紀前半期におけるベトナム北部山地の社会動態と国家統治―阮朝地簿の分析を中心に―」2019 年度東洋史研究会大会、2019.

④OKADA Masashi、“Effort and its Effect for Import-substitution of Cinnamon in Early Modern Japan: Implication for Sustainable Resource Management from East Asian and Global Context、”ASEAN-JAPAN WORKSHOP、2020.

⑤岡田雅志「ランドピープルの歴史と記憶－アイオワ州・黒タイ難民の事例を中心に－」メコン地域研究会 2021 年度 5 月例会、2021.

⑥岡田雅志「ベトナム国家とベトナム在住の少数民族－歴史的観点から－」メコン地域研究会 2021 年度 10 月例会、2021.

⑦OKADA Masashi、“Japanese pharmaceutical trading business and China at the turn of the 20th century、”ASEAN-JAPAN WORKSHOP、2022.

⑧岡田雅志「東西薬用植物の交差点としての近世長崎―関連史跡と資料」第 2 回アジア薬用植物史研究会、2023.

〔図書〕（計１件）

①　岡田雅志、『一冊でわかるベトナム史』河出書房新社、2024 年 8 月刊行予定、205p.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 岡田雅志	４．巻 -
２．論文標題 山地世界の生存戦略―西北地方の過去と現在―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 現代ベトナムを知るための63章【第3版】（明石書店）	６．最初と最後の頁 191-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡田雅志	４．巻 -
２．論文標題 周縁から見るタイのネーション形成―黒タイとタイ・ソンダムのはざまで―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 タイの近代化―その成果と問題点―（文真堂）	６．最初と最後の頁 140-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡田雅志	４．巻 -
２．論文標題 周縁から見た一統志―南の小中華と『大南一統志』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 書物のなかの近世国家―東アジア「一統志」の時代―（勉誠出版）	６．最初と最後の頁 214-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 OKADA Masashi	４．巻 -
２．論文標題 The Link Between Global Market Change and Local Strategy: The Case of Vietnamese Cinnamon in the Eighteenth and Nineteenth Century	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Changing Dynamics and Mechanisms of Maritime Asia in Comparative Perspectives (Palgrave Macmillan)	６．最初と最後の頁 75-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡田雅志	4．巻 -
2．論文標題 近世後期の大陸部東南アジア	5．発行年 2022年
3．雑誌名 岩波講座世界歴史12 東アジアと東南アジアの近世 ： 一五〜一八世紀	6．最初と最後の頁 225-243
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 岡田雅志	4．巻 -
2．論文標題 肉桂と徳川期日本―モノから見るグローカルヒストリー構築へ向けて―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育―日本史と世界史のあいだで―	6．最初と最後の頁 292-317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡田雅志	4．巻 -
2．論文標題 近世ベトナムにおける本草・博物書と植物資源―近世日本との比較の視点から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究（II）―ベトナム・日本の薬用植物資源流通と情報―	6．最初と最後の頁 5-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 岡田雅志	4．巻 -
2．論文標題 シナモンから見る近世東アジアの薬用資源流通と薩摩地方	5．発行年 2020年
3．雑誌名 アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究―シナモンがつなぐベトナムと日本―	6．最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Okada Masashi
２．発表標題 Japanese pharmaceutical trading business and China at the turn of the 20th century
３．学会等名 Family Business Workshop
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡田雅志
２．発表標題 ランドピープルの歴史と記憶－アイオワ州・黒タイ難民の事例を中心に－
３．学会等名 メコン地域研究会2021年度5月例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡田雅志
２．発表標題 ベトナム国家とベトナム在住の少数民族－歴史的観点から－
３．学会等名 メコン地域研究会2021年度10月例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Okada Masashi
２．発表標題 Effort and its Effect for Import-substitution of Cinnamon in Early Modern Japan: Implication for Sustainable Resource Management from East Asian and Global Context
３．学会等名 ASEAN-JAPAN Workshop
４．発表年 2020年

１．発表者名 Okada Masashi
２．発表標題 Global aspects on Vietnamese Cinnamon: Historical Dialogues between Vietnam and Japan
３．学会等名 Area Studies & Vietnamese Studies: Research and Training orientation（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡田　雅志
２．発表標題 周縁から見た一統志 －南の小中華と『大南一統志』－
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの一統志」
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡田　雅志
２．発表標題 19世紀前半期におけるベトナム北部山地の社会動態と国家統治―阮朝地簿の分析を中心に―
３．学会等名 2019年度東洋史研究会大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 岡田雅志	４．発行年 2024年
２．出版社 河出書房新社	５．総ページ数 205
３．書名 一冊でわかるベトナム史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関